

2012 年度 第 10 回全体研究会

「近代日本仏教研究」(第 2 回)

報告題目	近代日本における『大乘起信論』の受容
開催日時	2012 年 12 月 17 日(月) 17:00-18:30
開催場所	龍谷大学大宮学舎西翼二階大会議室
報告者	石井公成 (駒澤大学仏教学部教授)
ファシリテーター	桂 紹隆 (龍谷大学文学部教授)
コメンテーター	佐藤智水 (龍谷大学文学部教授)
参加者	33 人

【報告のポイント】

石井公成氏は、近代日本において、馬鳴 (Aśvaghoṣa) の作品として知られる『大乘起信論』(以下、『起信論』)が如何に受容され、語られたのかについて概観した。報告者はことに明治期(1868-1912)を中心として、旧帝国大学を軸とする初期のアカデミズム仏教学の枠組みでは、この著作は如何に位置付けされたのか、さらにその裏面に存在した政治性についても指摘した。

【報告の概要】

石井氏は、最近における『起信論』の研究動向から報告を開始した。当該テキストは、中国南地の真諦 (Paramārtha パラマールタ、499-569) による訳書ではなく、北地の菩提留支などの訳語と共通することが指摘されているとし、インドの真作か中国の偽作かといった二分論では最早とらえられなくなっていると述べた。こうして『起信論』をめぐる基本的な事柄を説明した上で、そのテキストを軸に近代日本仏教史におけるひとつの流れに着目した。そして、石井氏は、明治期以降の『起信論』の日本的受容を初めとして、近代日本仏教の課題に取り組む際には、この列島の事情のみならず、国家を超える見方も必要であると述べ、その具体例としてスリランカ人僧侶のダンマパーラ (1864-1933) と関わった日本の仏教徒の関係図を示しながら説明した。

1879 年に設立された東京大学で初めて「仏書」を講じた曹洞宗の原坦山 (1819-1892) は、その授業で『起信論』を中心的なテキストとして取り上げた。坦山は元々儒者であり、後に出家し、オランダ医学の影響も強く受けた。坦山は、1860 年代前半にすでに『起信論』

の研究を展開しており、真諦三蔵訳と実叉難陀訳のそれぞれの長所を合わせたテキストを構築しようとしていた。同時期、中国においては、楊文会居士（1837-1911）が自国の仏教の復興は学問的な仏教、とりわけ『起信論』に基づかねばならないと考えていた。つまり、東アジアにおける仏教の近代化は、『起信論』の再評価と結びついてなされたことになる。

この時期、欧米からの仏教学の影響も強く受けるようになる。すでに触れたように、1879年に東京大学の文科大学和漢文学科課外科目として「仏書講義」が設けられ、それを担当すべく原坦山が招かれた。それに出席した学生として、例えば、井上哲次郎（1856-1944）など、後に日本の知識層を率いるようになる者もいれば、当時の帝大文科大学総理・加藤弘之（1836-1916）や文部省の西村茂樹（1828-1902）も出席していた。つまり「仏書講義」に対して、それほどの期待が存在した、ということである。1881年に、学科改正にしたがって「仏書講義」は「印度哲学」と改められ、坦山はその枠組でも『起信論』の講義を続けた。これに出講した学生は、例えばアーネスト・フェノロサ（1853-1908）にヒュームやヘーゲルの哲学をも同時に習い、その新たな枠組で『起信論』を語る清沢満之（1863-1903）のような者が現れることになる。

1881年より、原坦山と隔年で「印度哲学」を担当するようになった大谷派の吉谷覚寿（1843-1914）も『起信論』を講じ、その注釈を刊行している。東京大学で、坦山、吉谷の後を継いだ村上専精（1851-1929）も『起信論』の注釈を出版している。つまり近代では、帝国大学（東京大学）、あるいは井上円了（1858-1919）が開いた哲学館（東洋大学の前身）などにおいて近代的な講義を行う者は、『起信論』を身に付け、注釈を著すことが常識となっていたようである。

こうして『起信論』は、まさに日本が近代的な仏教学を展開する上での、重要な柱となったのであり、日本国内で研究が次々と発表されていった。それは海外に関してもそうである。西田幾多郎（1870-1945）とともに帝大予備門で学んだ後、アメリカに渡り、ポール・ケーラス（1852-1919）の助手をつとめた鈴木大拙（1870-1966）は実叉難陀訳による『起信論』の英訳を1900年に出版する。この時期には、『起信論』の作者は誰であるかが問題となり、望月信亨（1869-1948）、前田慧雲（1855-1930）、島地大等（1875-1927）など、錚々たる研究者が『起信論』を論じ始める。『起信論』について学問的に厳密に検討することは、日本の近代的な仏教学の優位性を示す試みでもあったのである。

近代日本において重要な位置を占めた『起信論』は、中国や朝鮮においても極めて大きな役割を果たし、各国の仏教改革運動を展開する際、それぞれの国なりのやり方で用いられた。石井氏はその具体例のいくつかを示しつつ説明した。また、戦前・戦中の段階で日本ナショナリズムの道具としても使用された『起信論』は、戦後の学界・仏教界において

如何に継承されていったかなどを詳細に述べ、近代における『起信論』のひとつの受容史を描いた。



【議論の概要】

コメンテーターの佐藤智水氏は、摩訶衍の本体は衆生心であり、それには二つのアプローチする方法が存在するという、柏木弘雄氏『大乘起信論の研究』（春秋社、1981年）の見解を紹介した。そして、石井氏が詳しく述べた『起信論』をめぐる論争において、例えば「如来蔵思想は仏教にあらず」というような者は、『起信論』の全体像を踏まえて言うのか、あるいはそれが具体的な箇所を踏まえての発言なのかという点について質問した。それに対して石井氏は、「如来蔵思想は仏教にあらず」と主張する研究者は、『起信論』そのものというよりも、法蔵の『起信論』解釈に基づいて論じていることが多く、『起信論』の特色とされて批判の対象となった真如隨縁説などは、『起信論』自体に本当にあったかどうか疑問であり、テキストの読み方によって左右されると答えた。フロアからは、中国で成立したであろう『起信論』にみられる思想とインド仏教との関係についてのコメントや、そのテキストによる日本の伝統文化への影響について質問がなされた。体言・用言などの国語学の用語と『起信論』の体相用の思想の関係については、石井氏はそうした用語は中世の連歌論から発生したと述べ、そのような議論を展開したのは天台や真言などの素養をもつ人物であって、『起信論』にかなりの影響を受けていたと答え、『起信論』が中世当時の僧侶や知識人に共通する教養であったことを示した。『起信論』自体について様々な質問もあったが、石井氏は近代思想史の枠組で示されたそれらの問題への回答を述べた。